

第1回西播磨新地域ビジョン検討委員会 会議録（要旨）

1 日 時

令和2年12月18日（金） 10:00～12:00

2 場 所

西播磨総合庁舎 1階 大会議室

3 出席者

委 員：井関委員、谷口委員、田端委員、長谷川委員、三宅委員、久保委員、
門田委員、松尾委員、澁谷委員、西嶋委員、池田委員、宮下委員
代 理：八木副主幹（家氏委員の代理）、江見室長（服部委員の代理）
県民局：遠藤局長、円増室長、神尾、大西

4 内 容

- (1) 西播磨県民局長あいさつ
- (2) 検討委員会委員長・副委員長の選出について
委員長は谷口委員、副委員長は田端委員に決定
- (3) 西播磨新地域ビジョンの策定について
資料2～資料6により事務局から説明
- (4) 意見交換
資料7をもとに意見交換を実施（主な発言内容は以下のとおり）

（委員）

人口減少の問題からも、外国人との共生、活用が求められているが、コミュニティ維持の突破口になるのではと考えている。当町には国際交流協会もなく外国人活用の知見がないので、先進事例等があれば紹介いただきたい。

（委員）

大学と学生という立場で留学生と付き合いはある。留学生と労働者は違うので、一概には言えないが、色眼鏡を使っていないつもりでも使っている。留学生にとって社会福祉士などの国家試験合格は難しいと我々は思い込んでいるが、そんなことはない。日本人と差をつけていないつもりでも、助けが必要だと思い込んでしまっている。ネットでは繋がっているが、それ以外の個々の繋がりがないので、いかにコミュニティとしての繋がりを創るかが大切である。

（委員）

福祉教育の中で、人と接する際の「傾聴」の技術は教えているが、その方が生きてきた中で一番輝いていた時代の社会はどうだったのかを教えていない。そのため、仮に日本人同士であっても、特別養護老人ホームの実習現場で高齢者から「わしの若い頃は、どれだけ頑張って働いてきたか等々」の話を笑顔で聞いても、実習生は相手の話に共感が出来ていないので、高齢者は寂しそうにしている。そう考えると、言葉の壁というよりも、相手の話したいことに共感できるかどうか、教養というか、文化を共有できないと理解し合えないのではないかと、実習の現場から感じる。

（委員）

アンケート結果について、地域の課題や20年前と比べた地域を取り巻く環境変化を見ると、西播磨のいろんな課題が指摘されており、なんとなく暗い気持ちになりかけたが、地域の将来像や将来に繋がる動きなどを見ると、今後に向けた力強い意見や新たな取組みなどが垣間見えて、非常に希望の持てる意見

が多くあるように感じた。過疎化や少子高齢化の課題は非常に多くの方が指摘をしていて、どの自治体も同じような課題を抱えている中、何か突発的なことが起きない限りは、この流れは変えられないのではと思っている。

地方創生の中で移住・定住施策を実施しているが、アンケートにも指摘のあったとおり、近隣から住民を奪い合っているような状態に近いことになっているのではないかと。人口が減ることはそんなに悪いことなのか。指標に人口を使用すると負け組になるので、人口を使用しない新たな指標がないものかと考えている。人口が減っても一人当たりのリソースが増えとか、住民参加が増えて住民同士の顔がよく見えて暮らしやすくなるとか、現在の価値観とは異なる真の幸せを実感できるような場合もあるのではないかと考えている。

昨今の地域創生の動きの中で、市町村合併を推進してきた国が、成功事例として出してくるのが、近隣では西粟倉、智頭、海士、神山などだが、もともと人口が少なく合併しなかった町であり、大いに皮肉だと感じている。

本当に考えないといけないのは、人口が減っても豊かに暮らし続けられる地域を守っていく、またそういうふうに変化していくことが必要ではないかと考えている。

自治会活動が立ちゆかなくなる、コミュニティが消滅するという意見がたくさんあった。確かにこのままいけばそうだが、人口が減っているのに今までと同じようなやり方で続けようとしているからであって、自治会や地域運営組織は、人口が減ってもやっていけるように事業や体制を見直していく、そして変化していくということを考えていかなければいけないのではないかと。

ただ劇的な変化は誰もついていけなくなるので、時代に合わせてゆっくり変っていくのが大事なのではないかと考えている。国全体としても人口がどこまでも減っていくというのは問題だと思う。理論上、出生率が 2.08 を下回る限りは永遠に人口が減っていくと言われているが、各自治体が競い合うのではなく、国を挙げてこの問題に取り組んでほしいところではある。子どもを安心して産めるまち、安心して子育てできるまちというのが、どの年代にとっても暮らしやすいまちに繋がるのではないかと。

(委員)

30 年後の西播磨と同規模で現在活力を維持できているような他県の自治体データがあれば参考になるかもしれない。中山間地域で何か事例があれば紹介いただきたい。

(委員)

始めに、コミュニティと地域コミュニティについて、齟齬がないように使い分けてもらいたい。地域再生では、概ね中山間地域の小規模集落をコミュニティ、小学校区あたりの大きな単位を地域コミュニティとして使い分けている。

2050 年を展望した時、コロナによってこの 1 年でも大きく変化しているので、2050 年までには想像するより、もっと大きな変化が起こると予想される。緩やかに変化すればいいが、変化のスピードも速く、今のままではその変化についていけない。急激に変化することを前提に、地域が破綻しないような継承していける手立てが必要である。小規模集落がどんどん増加し、人口減少によってコミュニティの存続が危ぶまれているが、人口減イコール悪ではないというのは同感である。理由を考えたとき、かつてニュージーランドに住んでいた経験から、ニュージーランドは、日本の国土の 2/3 程度の広さで、人口約 450 万人程度で成り立っている。移民の国で活躍しているのは外国人。永住権を持

っていない人もかなり貢献している。日本においても、外国人との関係性は、こういった立場であってもこれから相当重要になってくると認識している。

地域運営の核となる人物は地元の者が適任だと思うが、農林コミュニティの分野では、外国人や興味を持っている地域外の者が短期でも自由に入出りできるコミュニティ、それを許容していく地域側の態度とか認識の変革が必要ではないかと思っている。例えば、ワンマン集落で自治会長一人に負担がかかり、他の者が関与できない集落であれば、仮に地域がうまく運営されていたとしても、これからの時代には好ましくない集落である。農林コミュニティをどう変えていくか、作りかえる必要性を感じている。

(委員)

外国人もそうだが、今の地方自治体は、障害者等の活用ができていないと感じる。障害者は長時間の緻密な作業を丁寧にやってくれるが、にもかかわらず、福祉サービスだけで日々を過ごしている。障害者は福祉分野でしか働けないと決めつけているところがある。

広島県三原市の例だが、シャッター街に無償貸与で特別養護老人ホームを呼び込んだ。社会福祉施設は実は永久エンジンである。人口減少している地域に、常に高齢者と若い働き手が来ることで、その施設を核に中心街の活性化を図ろうとしている。西播磨地域は福祉銀座と言われるぐらい社会福祉施設が多いにもかかわらず、その永久エンジンを活用できていないと感じている。

山林やそれに従事する人との共生の在り方も、この地域では大事だと思うがどうか。

(委員)

資料の中に森林関係に関する記述が少ないが、豊かな自然と暮らしたいとか、非常に森林に対する関心を持たれていて、喜びを感じている印象を受けた。自然豊かな地域に将来戻ってきたいという記載が見られたが、重要なのは雇用の問題。将来Uターンしたくても仕事がなければ戻ってこれない。学校や病院などのインフラ整備も重要だが、働く場、雇用をどうするかも重要。西播磨地域には山林が多く荒れ果てているなど、住民からお荷物という課題として捉えられている。

西播磨には、製材工場（協働組合兵庫木材センター）や木質バイオマス発電工場（株日本海水）といった日本でも有数の施設が揃っており、かなり珍しい。気がついていない住民は多いが、これらを上手く活用することで、お荷物の森林資源をお宝に変える可能性を秘めている。地域にこれだけの工場があり、消費地にも近いこの条件を有効活用することができれば、雇用や給料にも繋がっていくと思っている。

ご承知のとおり林業は非常に苦しい状況で、最大の問題は需要。ここ数十年の需要先は住宅建材だが、少子化で住宅着工数が減り、木材需要が減少し、材価が1/4になり、お荷物に思われている。地域として好条件が揃っている状況で、この森林資源をどう活用していくのか、新たな需要を見定め行政からも支援していく取組みを検討いただければと思う。

ヨーロッパでは、内装材や家具材は材価が高い。大規模な製材工場には安い木材を出し、地域には高価な木材を残し、地域で加工して村が収入していくという一つのモデルがある。そういった形で森林資源を活用して地域にお金を落とせる仕組みが作れればと思う。

豊かな自然とは、普段からどの程度日常的に自然と接しているか。ヨーロッ

パの事例だが、残材を地域の方が入札し、森へ薪を取りに行き暖房に使うなど、まちに住んでいる人にとって森が生活の一部になっている。西播磨の住民が望んでいるなら、森と地域住民との距離が近くなるような仕組みを検討するのも価値があるのではないか。森と住民との距離がより近くなれば、豊かな暮らしが実現するのかなと感じる。

(委員)

森林資源の活用はこの地域には重要。排出権取引に有効活用できないか。

(委員)

国内排出権取引（J-VER）は、林業でも10年前から設定され一部で取引されているが、現行はインセンティブがなく、あまり活発ではない。国や国際的な枠組みが変わると可能性は出てくる。J-VERは循環しないとCO₂の吸収にはならない。資源を使い、間伐、皆伐、再植林をしてCO₂を蓄積するサイクルが必要で、森林があるだけでは成り立たない。2050年には可能性はあるかもしれない。

(委員)

地域の課題は少子高齢化に尽きる。30年後目指すべき姿は、西播磨で子育てをしたいと思える地域になればよい。私自身は親のそばで子育てができるという理由から、龍野でたまたま子育てをしている。自然が豊かであるのはどこも同じで、西播磨で子育てをしたいと選んでもらえる理由になるとは思えない。子供が読み書き困難者（ディスレクシア）であるため、学習支援員の勉強をしている中で知ったのだが、東京との教育環境の差が大きいことに絶望した。その経験から都心並みの教育水準、学び方の自由度の高い教育環境があれば、西播磨で子育てをしたいと思ってもらえる理由になるのではないか。私自身、親が転勤族であったため地元愛はないが、子どもには帰ってこられなくても西播磨を好きであってほしいと思っている。そのためには、学びであったり、遊びであったり、小学校の頃の楽しい思い出が大事で、地元を好きになるきっかけにもなる。

また、私たちの世代は、自治会や地域との繋がりは面倒で、あまり参加していないのだが、子どもを巻き込んだ地域づくりができればいいと思う。大人が考えても面白いアイデアが出てこないの、自治会運営のアイデアを子どもから出してもらい、それが実践されることで、子どもも嬉しいと思うし、さらに地元が好きになると思う。

(委員)

私の地元でも自治会はほとんどが男性。男性は定年まで地域との繋がりが薄く、実際に地域と繋がりが貢献しているのは女性だが、自治会組織への女性の参画はほとんどない。自治会運営も男性の発想で行っており、継続性のある面白い発想はないなと委員の意見を聞いて感じた。

生活保護率のデータを紹介しますと、西播磨圏域は1%もない。姫路で2%前後、神戸で4%、大阪が5%、西成区では約20%。都市部の者が元々貧困だったわけではなく、雇用のない地方から都市部に行き、そこでも雇用されないまま生活保護者になる。生活保護費を負担している大阪からすると、出身自治体が負担すべきという話を聞く。他の委員の意見にもあったように、地域を活かした雇用について考えていく必要性を感じた。

(委員)

15年以上、地元の坂越地域でまちづくり活動や清掃活動に関わり、年間推定

6万人が坂越に来るようになった。また、赤穂市の現状を少しでも多くの市民の方に知ってもらい、市民の参画と協働が生まれるように取り組んでいる。その中で日頃感じていることは、行政と住民との接着剤になる人材が不足していること。自治会は権力志向の集まりではなく、公平に市民と接するような組織になる必要がある。地元でも高齢化が進んでいるが、災害時や買い物支援など、高齢者が安心して暮らせるように、本当に困っている人の接着剤になり、行政との潤滑剤になれる人材が必要だと感じている。そのために、公民館に職員を配置し支所的な役割を担えないか、その環境整備が必要。

(委員)

公民館の有効活用はその必要性を常に感じている。

(委員)

社会学の観点から、今後の人口減少に重要な視点として、「社会の形」がある。人口が増加していく昭和の時代には、「昭和の社会の形」があった。中央集権、行政主導、上意下達、男性重視、年長者重視、大都市大企業志向、拡大再生、専業主婦等が、高度成長を作り出し上手くいった。それが30年前に傾き環境が大きく変わったが、既得権益等もあり「昭和的な社会の形」は大きく変わらず今に至っている。その形から決別しなければ、山積した問題を包括的に解決できない。ビジョン委員会自体も行政主導で昭和的な形であり、改めていく必要がある。地域、産業等多方面で、「昭和的な社会の形」を大きく変える必要がある。ベーシックインカムのような大きな抜本的な改革が重要。

今回のビジョンで注目しているのは、ビジョンを語る会等の県民との意見交換。延べ588人が参加し何らかを考える機会を作っているのは大きな成果である。ビジョンそのものよりも、ビジョンを作るプロセスで人々が繋がり、考えたり、意見交換する機会を作ることが新しい。今後も進めてほしい。

(委員)

当市では、これから10年、20年後には地域が地域を支えられなくなるところが出てくる。これからは地域外を巻き込んだ新しいコミュニティづくりが必要。ボランティアでは地域づくりは続かないため、地域で儲ける仕組みづくりも必要。

行政での20年前と比べた環境変化を考えると、やることは増えているが、職員は減り日々の仕事に追われている。30年後を考えた時、AIやITにより仕事は楽になっているかもしれないが、ますます職員が減り、日々の仕事に追われ、新しいことを考えられなくなっているような気がする。しかし、何もしなければ、まちは衰退していくので、新しい仕組みを生み出すには、市民や民間との協働による取り組みが必要。ある地域が、自分たちのまちの未来計画を自分たちで作ったように、「市民協働」の取り組みを進めたいと思っている。

サップをやっている者と障害者がたまたま交流する機会があって実現した連携事業だが、障害者がサーフィンを体験する取り組みを行ったところ、障害者も非常に喜んでおられ、対外的にも評価され表彰も受けた。これは普段交わることのない福祉と観光が交わることによって生まれた取り組みだが、これまで見つけられていない住民サービスやニーズがあると気づかされた。横断的な取り組みに力を入れる必要性を感じている。

(委員)

他の委員が言われたように、住民の方々の意見は宝である。昔、上司から言われたことだが、行政は住民がどう考えているかを拾い上げてそれを執行して

いく役割。これだけの宝をどうマッチさせ、アンマッチを避けていくかが西播磨地域ビジョンでの役割かと思う。

(委員)

次世代の人材を育成する上でも、子育てや教育が大事だと感じている。

(委員)

自分自身、小さい時のいい思い出があって地元に戻ってきた。雇用面だけでUターンするのではなく、自然と共に育ったとか子供の頃のいい思い出や環境が大事であるかもしれない。

(委員)

森林関係で議論されていることの補足だが、森林組合の全国平均給与は約300万円台で、危険な仕事にもかかわらず、十分な給料とは言えない。そのような状況で、今議論されているのは夫婦雇用。IUターン者の一人の給与では生活できないが、夫婦で雇用できれば生活できるという考え方。近隣から野菜を分けてもらう、薪等安く手に入るなど、トータルで生活をデザインする田舎ならではの生活スタイルもある。

(委員)

検討過程を通じていろいろな人と関わっていく機会を作ることに価値があり、新しい動きを支援していければなおよい。ビジョンを作ることも大切だが、その過程で生まれる動きや繋がりを維持、サポートしていくことも重要。

また、効率化、負担軽減等の観点から、検討委員会のオンライン開催を検討願いたい。

(委員)

遠方からの委員もおられますし、オンライン参加が可能になるように事務局には検討願いたい。

(委員)

GOTOトラベルが今まで止められなかった理由は、地方経済の仕組みが固定されているからではないか。GOTOトラベルに東京が参加して地方経済が持ち直したと言われている。東京から地方にお金が出てきて、ようやく地方は一息つくという地域経済の現状があるので止められなかった。大都市から地方にお金を流すという地方経済の今の流れを変えなければいけない。地方から何ができるのか。

キーワードは「循環」ではないか。大都市から地方へ一方的に流れるのではなく、人やお金の循環を作っていないと西播磨は大変なことになるのかなと思う。兵庫県の中で西播磨のメリットは岡山に近いこと。岡山でも面白い取り組みをやっているのだから、いかに人の循環ができるか。一番近い岡山と循環をキーワードにいろいろ出来ることがあると思う。小さな地域内での循環、グローバルな循環、岡山との循環、考えられることはたくさんあると思う。神戸や阪神間にはない発想が出てくればよい。

(委員)

東備西播定住自立圏構想でいえば備前市があるので、そことの連携が考えられる。

(遠藤局長)

地域の皆様の生の声が大事だということを承った。

テクノについて、企業誘致が進まない、住宅が増えないなど、県民から厳しい意見も聞くが、テクノで生まれ育った小中学生からは、小鳥のさえずりや綺

麗な星、電柱がなく景観が良いなど、テクノの良いところをたくさん聞くことができる。今日の話にもあったように、思い込んでいるとか、既定概念が我々を縛っているところがある。

西播磨は若干保守的と感じるところがある。チャレンジ精神という面では、移住者は何らかのアクションを起こして西播磨に移住されており、西播磨の良いところや外から見たするどい意見をいただけるので、移住者の声を大切にしたいし、移住者の横の繋がりも広げていきたい。

森林の話では、里山資本主義。人との繋がりとか、GDPには換算されないお金では計れない価値観をどう表現していくか考えていく必要がある。

多様性があって自立という点では、西播磨は自立的な地域ではないかと思っている。森林資源、再生可能エネルギー、食料自給率など、循環と共に自立も一つのキーワードになると考えている。